

國學院大學學術情報リポジトリ

近代点字表記法書にみる点字かなづかいについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 真樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000909

近代点字表記法書にみる点字かなづかいについて

中 野 真 樹

1. はじめに

日本語をかきあらわすための文字として、視読文字である墨字のほかに、触読文字である日本語点字がある。日本語点字は、6点点字1字がかな1字にほぼ相当する「点字かな」によってかけられる。そして、基本的には漢字を使用しないかな専用文で、文節わかちがきをもちいて日本語をかきあらわす。また、文字情報としての情報発信・受信の手段のひとつとして、私的な文書から教育、公共サービス、公文書、公的な署名、投票、各種試験等さまざまな場面でひろくもちいられており、社会的な地位を確立している。

そして、点字には墨字のかなづかいの「よりどころ」となる「現代仮名遣い」（昭和61年内閣告示第1号）とはことなる日本語点字独自の点字かなづかいがある。

点字の表記法の基準となるものは、日本点字委員会によって定められている。日本点字表記法は、およそ10年に1度、みなおしがおこなわれることになっている。最近では、2001年におおきな改訂があり、『日本点字表記法2001年版』（日本点字委員会編刊）がまとめられた。

点字かなづかいの特徴についてまとめると、以下のとおりとなる。

(1) 助詞の表記は「ㄱ (わ)」「ㄴ (え)」「ㄷ (を)」となる

(2) 長音表記は以下の通りとなる。

ア列長音 「ア列+あ」 ㄱㄴㄷㄹㄱㄴㄷㄹㄱ (おかあさん)

イ列長音 「イ列+い」 ㄱㄴㄷㄹㄱㄴㄷㄹㄱ (おにいさん)

ウ列長音 「ウ列+ー」 ㄱㄴㄷㄹㄱ (くーき・空気)

拗長音 「拗音符+ウ列+ー」 ㄱㄴㄷㄹㄱ (しゅーり・修理)

オ列長音 「オ列+一」 (おーさま・王様)
「オ列+う」 (おもう・思う)

「オ列+お」 オオカミ (おおかみ) こおり (こおり)

拗長音 「拗音符+オ列+長音符」 $\begin{smallmatrix} \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \\ \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot & \cdot \end{smallmatrix}$ (しょーがつ・正月)


 (はなぢ・鼻血)
 
 (つづく)

このような点字表記の特徴については、1887（明治20）～1890（明治23）年ごろに日本語点字の基礎をつくりあげた石川倉次ら東京盲啞学校⁽²⁾の教員が、かな専用・かなづかい改定論を主張するかなもじ論者であったためであると説明される。また、1900（明治33）年から小学校教科書で使用された「明治33年式棒引きかなづかい」の影響についても指摘されている。しかしながら日本語学の文字・表記研究の観点から、実際の点字資料をつかった文字・表記の調査・研究はあまりなされておらず、これらのかなづかい改定論やその実践例が具体的にどのように日本語点字の表記に影響をあたえていたのかということは完全にあきらかとはなっていない。

— 2 —

2. 日本語点字の成立

フランスでルイ・ブライユが3点2行の6点点字を完成させ、それが文字として公式に採択されたのは1854年のことである。

日本においては明治期の視覚障害者への文字教育には、たとえば墨字を浮き立たせた凸字を触覚により読字するという方法がおこなわれていたりしたが、なかなか成果はあがらなかった。そのことに心をいためた東京盲啞学校の教員小西信八が、6点点字に着目し、日本語点字を考案するようにとすすめたのは、1887（明治20）年のことである⁽³⁾。

そして小西は同僚の石川倉次らに点字翻案の依頼をし、石川は1890（明治23）年にかな1字を6点点字1字と対応させた日本語点字を考案した。同年11月、東京盲啞学校で開催された点字選定会で、この石川案の日本語点字が採択された。そして1899（明治32）年に拗音がくわり、さらに1937年に特殊音点字表記が追加され、現在の日本語点字の骨子ができあがった。

日本語点字の表記はかならずしも統一されていたわけではなく、時代や分野ごとによってさまざまなゆれや変化がみられる。金子（2007）によると点字表記史は、おおきく時代によって4期にわけられる。

第1期

日本点字が成立した23（1980）年頃から約10年間である。このころは歴史的かなづかいがもちいられていたという。

第2期

当初は歴史的かなづかいがもちいられていた日本語点字であるが、点字教科書等に歴史的かなづかいをもちいるか表音的かなづかいをもちいるかというかなづかいの方針については、点字関係者の間でも意見がわかれ、議論がおこなわれた。そのなかで、点字でかかれた国定教科書『小学校国語読本』（1903（明治36）年）は字音語に棒引きかなづかいが採用された。また、1907（明治40）年におこなわれた第1回全国盲啞教育大会で、「盲生に国語を

教ふるにはすべて発音通りにして文部省許容の長音符を用ふ事」が決議され⁽⁴⁾た。1920（大正9）年に帝国盲教育会が発足し、1922（大正11）年に「帝国盲教育会点字図書出版部点字書方」^{かきかた}が発表され、同年10月に改訂案がだされている。これがはじめての日本語点字表記法といえるものであり、かなづかいについては以下のようにのべられている。

- 一、国語は正しき国語仮名遣ひを用ひ、漢字音及び外国語は拗音及び棒引を用ふ。
- 二、クワとカとを区別す。例 ^{クワジ} 火事。 ^{かじ} 家事。
- 三、ア行とワ行とは書き分ける。例 ^{スキ} 水。
- 四、タ行とサ行の濁音は書き分ける。例 ^{ヂシン} 地震。 ^{ジシン} 自身。

ここで規定されている日本語点字かなづかいは、和語は歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかいをもちいる、「明治33年式棒引きかなづかい」と共通するものであったことがわかる。⁽⁵⁾この第2期は、約20年ほどつづく。

第3期

墨字による小学校教育は歴史的かなづかいにもどるが、点字のかなづかいに関する議論はつづき、第2期の後半から日本語点字は独自の表音的なかなづかいへと変化していく。1922（大正12）年に創刊された新聞『点字大阪毎日』が字音語・和語ともに表音的なかなづかいを採用し、これが表音的なかなづかいの普及に大きな影響をあたえているといわれている。これが第3期であり、約30年間つづく。

1927（昭和2）年に、文部省が点字教科書編さんのため盲学校教科用図書調査委員会をもうけ、翌1928（昭和3）年に盲学校教科書編纂委員会をもうけた。⁽⁶⁾同年、文部省より「点字書き方ニ関スル法則」が発表され、そのなかで「点字は発音するとおりに書く」とした。この文部省著作、大阪毎日新聞社発行の点字教科書はイ列長音やエ列の字音語の長音表記にも「ちーさい（小さい）」「てーねー（丁寧）」のように長音符がもちいられることや、よつが

なの区別をおこなわないこと、動詞「言う」を「ゆー」と表記するなど、現行の点字かなづかいより表音性のつよいものであったことが観察されている。⁽⁷⁾

第4期

1946（昭和21）年に、「現代かなづかい」が発表された。また、国定教科書が廃止され、1949（昭和24）年から検定教科書の使用がはじまる。それにとともに、日本語点字表記の不統一が問題となり、全国的な統一と体系化がめざされた。1955（昭和30）年に京都府立盲学校を中心とした点字関係者によって日本点字研究会が発足し、全国の盲学校がこれに加入した。そして1959（昭和34）年に、『点字文法』が出版される。⁽⁸⁾

3 日本語点字表記法書の比較

かなづかいについてくわしくしるされた日本語表記法書が刊行されるのは日本語点字表記史区分の第3期からである。この時期、各地の盲学校や点字関係者が、かなづかいに関する研究をおこなっており、1935（昭和10）年に東京盲学校が『日本訓盲点字』を作成した。これは点字の表記法についてしるされたもので、かなづかいについては、「点字書方要項」に以下のようにしるされている。

二、仮名遣ひについて

- （1）仮名遣を表す必要のある場合の外総て発音通りに書く。
- （2）発音は東京を中心とする標準発音に従ふものとする。
- （3）テニヲハのヲは普通の発音はオなれども、例外としてヲを用ふ。

（金子2007：資料21）

また、1940（昭和15）年に、近畿盲教育研究会が、点字表記の再検討を目的として、『点字規則』をまとめた。ここにあげられているかなづかいに関

する記述を抜粋する。なお、例は省略できる場合は適宜省略する。

第5 表記法（仮名遣い）

1. 点字はすべて発音どおりに書く。ただし、古文、国文法、その他歴史仮名遣いを必要とする場合は、歴史的仮名遣いによって書く。
2. 発音は、標準語の発音に従って書く。
3. 第1種点字（引用注：記号や特殊音点字などをのぞいた点字かな）のなかで、「ヂ ツ チャ チュ ジョ キ エ ヲ」に相当する文字は「ジ ズ ジャ ジュ ジョ イ エ オ」の点字で書く。
（例）クジラ（鯨） ジシン（地震） ミズ（水）
4. てにおはの おは、「ヲ」を用う。
（例）カオヲ アロー（顔を 洗う） ウオヲ トル（魚を取る） サオヲ カケル（竿を かける）
5. 連濁による「ヂ ツ チャ チュ ギョ」は、そのまま書いてもよい。
（例）ハナヂ（鼻血） コヅツミ（小包） ミカヅキ（三日月）
9. 長音は、すべて長音符を用いて書く。
（例）トーキョー（東京） オーサカ（大阪） コーベ（神戸）
10. イ列、エ列の音が長音になった場合は、長音符の代わりに「イ」を用いて書いたほうがよい。
（例）イイダ（飯田） シイタケ（椎茸） 詩歌（シイカ）
エイセイ（衛生） ケイサン（計算） セイト（生徒）
ただし、ニーサン（兄さん） ネーサン（姉さん） オジーサン（おじいさん）などは、長音符を用いて書いたほうがよい。
11. 2字の字音が一緒になって、イ列、エ列の長音になった場合は、長音符を用いなくて必ず「イ」を用いて書く。
（例）キイト（生糸） キイノクニ（紀伊国） チイキ（地域）
12. 用言の活用する部分が、イ列、エ列の長音となった場合は、長音符を用いなくて、必ず「イ」を用いて書く。
（例）イイテ（言いて） キイテ（聞いて） シイテ（強いて）

13. ア列、ウ列、オ列の音が長音になった場合は、長音符を用いて書く。

(例) オカーサン(お母さん) オーバーサン(おばあさん) アー(ああ)
ヤー(やあ) ワーワー(わあわあ) クーキ(空気) スージ(数字)
フーリン(風鈴) ツーズ(通ず) ユーダチ(夕立ち) オーオカ(大
岡) コーシ(孔子) ソージ(掃除) トーヤマ(遠山) ホーキ(箒)
モージン(盲人)

(オカアサン オーバアサン アア マア ナアニ クウキ スウジ オ
トオト オトオサン などとは 書かぬ)

14. 用言の^{ママ(10)}カッター部が、ウ列、オ列の音の長音になった場合は、長音符を用いて書く。

(例) クー(食う) ユー(言う) オモー(思う) タモー(賜う) …

15. 音響、またはこれに類する長音は、長音符を用いて書く。

(例) カーカー ブーブー キューキュー…

(金子2007：資料19)

この『点字規則』のかなづかいにかんする記述は、詳細な具体例をあげており、現行の点字かなづかいとの比較が可能である。これらをくらべると、現行の点字かなづかいでは長音符をもちいずにななをつかってかきあらわされる長音表記であるア列・イ列の長音表記や「オ」をそえて表記するオ列の長音の「大阪」などの語にも長音符をもちいていることから『点字規則』のかなづかいは現行の点字かなづかいよりも表音性のたかいかなづかいであるといえる⁽¹¹⁾。しかし、さきに紹介した大阪点字毎日社が刊行した点字教科書のかなづかいとはことなり、エ列字音語長音や活用語の活用語尾には長音符を使用しない。このように、第3期に発行された資料のなかでも、刊行時期や発行機関によって、かなづかいはことなっている。

そして、第二次世界大戦がおわり、点字表記の体系化をはかる第4期にはいり、点字指導のための点字表記法『点字文法』が、日本点字研究会より発行される。『点字文法』にみえるかなづかいの記述を以下にまとめる。

第1章 書き現し方

概要

1. 点字は現代語音に基いて書くのを原則とし、歴史的仮名使いを必要とする場合は、歴史的仮名使いを用いて書く。
2. 従って「ち、づ、ちゃ、ちゅ、ちょ、ぬ、ゑ、を」に相当する文字は、それぞれ「じ、ず、じゃ、じゅ、じょ、い、え、お」を用いて書く。(但し3、4参照)

連濁

3. 連濁による「ち、づ、ちゃ、ちょ」は、そのまま書いても良い。

【例】 はなち こづつみ

助詞 を、は、へ

4. 助詞の「を」は「を」を用いる。但し助詞の「は」及び「へ」は、それぞれ「わ」及び「え」を用いる。

【例】 本を読む 私は 川へ

長音

6. 長音は長音符を用いて書く

【例】 とーきょー(東京) おばーさん こーつ(交通) あーそーか うーん

7. 「い」列「え」列の音が長音になった場合は、長音符の代りに「い」を用いて書く。

【例】 いいえ しいたけ(椎茸) しいか(詩歌) ちいさい(小さい) にいさん(兄さん) おじいさん とけい(時計) えいせい(衛生)

8. 動詞、形容詞の活用部分が「い」の長音となった場合は、長音符を用いないで「い」を用いて書く。

【例】 しいる(強いる) きいて(聞いて)

うれしい(嬉しい) ●●●●●●●●
 --- -- -- -- --

9. 動詞活用語尾の「う」は長音符を用いないで「う」を用いて書く。

【例】 くう(食う) すう(吸う)

10. 形容詞の音便の形の「う」は長音符を用いて書く。

【例】 はよーおきなさい(早く起きなさい) ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ ♪♪♪♪

うれしゅーぞんじます

11. 意志又は推量を表す助動詞「う」「よう」は長音符を用いて書く。

【例】 本を読もう  

[illegible]

12. 擬声語、擬態語で長音のある場合は長音符を用いて書く。

【例】 がーがー(があがあ) 

(金子2007：資料22)

この『点字文法』のかなづかい特徴は、いままで「発音のとおりにかく」とされてきた点字かなづかいについて、その概要で「現代語音に基づいて書く」とした点にある。これは、墨字のかなづかいが「現代かなづかい」を採用しその「まえがき」に「このかなづかいは、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである」とかかれていることに関連する。⁽¹²⁾

点字表記史区分でいう第3期の点字表記法である『点字規則』は、長音表記に長音符を非常におおく使用する表音性のたかかなづかいであった。しかし、第4期に刊行された『点字規則』は、長音符をもちいていた活用語の活用語尾の長音表記は長音符ではなくかなをもちいるようになっている。この『点字文法』の改訂版として1968（昭和43）年に『点字文法（点字国語表記法）』が出版された。この改訂版で外来語の表記および特殊音の表記にかんする事項が追加された。また、連濁による「ぢ」「づ」の表記については、『点字文法』では「そのまま書いてもよい」と許容の姿勢であったものが、改訂版では連濁による「ぢ」「づ」の使用を本則とした。

盲学校の関係者を中心として組織されていた日本点字研究会は、日本語点

字表記の統一のため、1966（昭和41）年に点字出版所や点字図書館関係者などもふくんだ新しい組織、日本点字委員会へと発展した。日本点字委員会は1971（昭和46年）に『日本点字表記法（現代語編）』を出版した。ここで、「現代かなづかい」への言及があらわれる。また、実際のかなづかいも「現代仮名遣い」との共通点がふえていく。

たとえば、長音表記のうち、長音符があらわれるのはウ列・オ列にかぎられ、『点字文法』およびその改訂版では長音符をもちいるとされていたア列和語「おかーさん」などは、ここから「おかあさん」のようにア列のかなに「あ」をそえる形が本則になり、これまで本則であった長音符による長音表記は許容事項となる。になる。また、オ列の長音のうち、「大阪」のように、オ列のかなに「お」をそえる語にかんしては、「オ列の長音のうち歴史的かなづかいで『ほ』と書かれていたものについて、現代かなづかいどおりに「お」を用いて書いてもよい。」（金子2007：資料24）とあり、現行の点字かなづかいとの共通点がおおくなっている。

また、1980（昭和55）年に『改訂日本点字表記法』が刊行される。このなかの「第1節 現代語のかなづかい」のなかで「現代語をかな（主としてひらがな）で書き表す場合、1946年に国語審議会が示した『現代かなづかい』と、1956年にそれをうらづけた『正書法について』に基づいている。（金子2007：資料25）」として、点字のかなづかいと「現代かなづかい」との関連についてのべている。また、『日本点字表記法（現代語編）』では許容のあつかいであったオ列の和語の長音に変更があり、もとは歴史的かなづかいでは「ほ・を」とかきあらわした「おおかみ」「こおり」などの語は、長音符ではなくオ列のかなに「お」をそえる表記が本則となった。

1990年には、日本の点字制定100周年記念として、『日本点字表記法 1990年版』が刊行された。ここではおもにわかちがきにかんする改訂がおこなわれたが、かなづかいにかんしてはア列とオ列の和語の長音表記に長音符をもちいるという許容事項が削除された。そして2001年に『日本点字表記法 2001年版』が刊行される。これが現行の点字表記法書となる。この改訂もわかちがきに関するものが中心であるが、「6章 古文の書き表し方」「第7章

漢文の書き表し方」が追加された。⁽¹³⁾

このように、点字は墨字とくらべてはやい時期から継続して歴史的かなづかいではなく、より表音的なかなづかいが採用されていたことがしられている。また、点字のかなづかいは時代によって変化していることも確認されている。具体的には、助詞の表記が「わ」「え」「を」となる点は、第3期の初期から現代にいたるまで一貫している。しかし、よつがなと長音表記については第3期から第4期にかけて変更がみられる。そこで、第3期の『点字規則』、第4期の『点字文法』『点字文法 点字国語表記法』『日本点字表記法』『日本点字表記法 1990年版』『日本点字表記法2001年版』から、擬音語・擬声語をのぞいた和語・字音語のかなづかいについて、一覧表にまとめた。(表1)。

【表1 点字表記法書の比較】

	よつがな	ア列	4列	ワ列	エ列	オ列
点字規則 (1940)	「じ」「ず」に統一。 [許容]連濁の「ち」「つ」	ア列＋ おかーさん	4列＋ にーさん しいたけ きいて (聞いて)	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) ゆー (言う)	エ列＋い えいせい (衛生) エ列＋ ねーさん	オ列＋ おーさか (大阪) ごーし (孔子) よもー (読もう) おもー (思う)
点字文法 (1959)	「じ」「ず」に統一。 [許容]連濁の「ち」「つ」	ア列＋ おかーさん	4列＋い しいたけ いいえ きいて (聞いて) にいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う) ううん	エ列＋い えいせい (衛生) エ列＋ ねーさん	オ列＋ おーさか (大阪) じーきよー (東京) あふのーごさいます よもー (読もう) おもー (思う)
点字文法 点字 国語表記法 (1968)	「じ」「ず」に統一。 ただし連濁は「ち」「つ」 があらわれる。	ア列＋ おかーさん まー	4列＋い しいたけ いいえ きいて (聞いて) うれしい おにいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う)	エ列＋い えいせい (衛生) エ列＋ ねーさん	オ列＋ おどーさん おーさか (大阪) じーきよー (東京) よもー (読もう) おもー (思う)
日本点字表記法 (1971)	「じ」「ず」に統一。 ただし連濁は「ち」「つ」 があらわれる。	ア列＋あ おかあさん まあ おかーさん まー	4列＋い ひいらぎ いいえ きいて (聞いて) にいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う)	エ列＋い えいせい (衛生) [許容]エ列＋ おねーさん	オ列＋ おどーさん おーごん (黄金) よもー (読もう) おもー (思う) [許容]オ列＋お おおい (多い)
改訂日本点字表 記法 (1980)	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の通称」には「ち」「つ」があらわれる。	ア列＋あ おかあさん まあ おかーさん まー	4列＋い おにいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う)	エ列＋い せんせい (先生) エ列＋え ええ [許容]エ列＋ おねーさん	オ列＋ とーきよー (東京) よもー (読もう) おもー (思う) おおい (多い) おほ (額) ※「おーきい (大きい)」などの「オ列＋」も許容
日本点字表記法 1990年版	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の通称」には「ち」「つ」があらわれる。	ア列＋あ おかあさん まあ	4列＋い おにいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う)	エ列＋い せんせい (先生) エ列＋ ええ	オ列＋ オーサワ (王様) よもー (読もう) おもー (思う) おおかみ (狼) おおい (多い) ほお (頬)
日本点字表記法 2001年版	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の通称」には「ち」「つ」があらわれる。	ア列＋あ おかあさん まあ	4列＋い おにいさん	ワ列＋ くーき (空気) くう (食う) いう (言う)	エ列＋い せんせい (先生) エ列＋え ええ	オ列＋ オーサワ (王様) よもー (読もう) おもー (思う) おおかみ (狼) おおい (多い) ほお (頬)

この表をみると、よつがなについては第3期刊行の『点字規則』では「じ」「ず」にほぼ統一され、連濁の「ぢ」「づ」は許容のあつかいであったものが、『日本点字表記法』からは、本則として連濁には「ぢ」「づ」があらわれるようになることがわかる。また、『改訂日本点字表記法』からはいわゆる「同音の連呼」にかんする記述もみえ、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」と同様のものとなる。

長音表記も変化があり、『点字規則』ではア列からオ列までのすべての列で長音符を使用する例が本則としてあげられている。ところが、『点字文法』でイ列の長音表記に長音符がつかわれなくなり、さらに『日本点字文法』ではア列とエ列の長音符が許容となり、本則からはずれる。『日本点字表記法1990年版』からはア列とエ列の長音符の使用の許容もなくなり、長音符による長音表記はウ列とオ列にかざられるようになる。

ウ列とオ列についても、『点字規則』では活用語の活用語尾にも長音符がつかわれていたのにたいして、『点字文法』からは活用語の活用語尾については長音表記ではなく「う」をそえる表記になる。また、オ列にかんしては『日本点字表記法』から「オ列+お」という形が許容としてあらわれる。これらは、「おい(多い)」「とおい(遠い)」「こおり(氷)」などといった「現代かなづかい」「現代仮名遣い」でもオ列のかなに「お」をそえる長音表記となる語につかわれる。そしてこの許容は『改訂日本点字表記法』から本則となり、それまで本則であった長音符による長音表記が許容事項となる。その後、『日本点字表記法』では長音符による長音表記が許容からはずれる。これにより日本語点字の長音表記は、ウ列とオ列の字音語の長音に長音符をもちいる点以外は、墨字の「現代仮名遣い」と共通したかなづかいとなる。

墨字のかなづかいが歴史的かなづかいをもちいていた第3期には、点字のかなづかいは独自の表音性のたかいものであったが、1946年に「現代かなづかい」がだされてからは、点字のかなづかいは徐々に「現代かなづかい」に接近していき、その結果、表音性はひくくなっていく。このように、第4期は日本語点字表記の全国的な統一というところみのほかに、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との関連性を明確にするという目的があったこ

とは、この表からもうかがえる。⁽¹⁴⁾

4. まとめ

日本語点字は、6点字1字がかな1字にほぼ対応する、点字かな専用文による文字表記システムである。日本語点字考案されたのが明治23（1890）年のことであり、改良をくわえながら現在も使用されつづけており、点字使用者による独自の文字文化をもつ。

また、日本語点字は、明治のおわりから大正にかけて、すでに歴史的かなづかいではなく表音的なかなづかいが使用されており、独自の表記の歴史をもっている。点字の表記史はおおきく4期にわけられており、歴史的かなづかいでかかれた第1期をへて、和語は歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかいという折衷的なかなづかいをもちいた2期、独自の表音性のたかいかなづかいをもちいた第3期、そして表音性がひくくなり、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との共通点をおおくもつ第4期のかなづかいと、変化していった。

そして各期の点字表記法書資料をしらべると、つねにそのときどきの国語施策との関連がうかがえる。たとえば第3期に刊行された表記法書『点訳の栞』には「点字は、発音どおりにかくことが原則である。活字の場合普通に使われて来た仮名遣い法にはよらない。（本書の仮名遣い法は、国策が示す通りの、発音式である）」とする（金子2007：資料20）が、第4期になってから刊行された『日本点字表記法（現代語編）』では1951（昭和31）年にだされた国語審議委員会「正書法について」を引用しており、冒頭には「現代語は、現代国語の音節と標準的な語意識にもとづいて書きあらわし、（略）」とかかれており、表音性ではなく表語性を強調している（金子2007：資料24）。また、第4期の点字かなづかいは、第3期のかなづかいとくらべると「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との共通点がおおくなっていくことが確認できた。

このように日本語点字は墨字とはべつの独立した歴史と文化をもつ文字・

表記システムではあるが、日本語文字・表記研究および表記史研究の資料としてもちいるばあい、墨字との関係性についても考慮する必要がある⁽¹⁵⁾。

これまで確認したように、日本語点字のかなづかいについては、これまでなんとか表記法書がまとめられており、おおよその概要やかなづかいの変化をすることができる。しかしながら、実際の近代点字資料をもちいての表記の研究はまだおこなわれていないため、点字資料が点字表記法書をどれだけ反映しているのか、確認はされていない。また、点字表記法書に掲載されているかなづかいは一部の語にかぎられる場合もあり、表記法書ごとの変化をみようとする、とりあげられている項目ととりあげられない項目があり、いちがいに比較することができない。点字かなづかいについてさらにくわしくするためには、今後、実際の点字資料にあたっての調査が必要となろう。

注記

墨点字のフォントは、社会福祉法人日本ライトハウスのサイト (<http://www.eonet.ne.jp/~tecti/index.html>) で配布されているものを使用した。

この研究は、2010年～2012年度科学研究費補助金若手研究（B）「近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究」（課題番号:22720188）の助成をうけたものである。

注

- （1）これは現代語・口語文のかなづかいであり、古文の場合、和語は歴史的かなづかいが使用される。ただし、ウ列・オ列の字音語の長音表記は、古文においても字音かなづかいを使わず、長音符をもちいる。
- （2）東京盲啞学校。現在では筑波大学附属視覚特別支援学校となっている。同校の歴史については東京盲学校（1935）、および同校ホームページの沿革（<http://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/enkaku/enkaku.html>）を参照した。
- （3）1879年にはすでに、文部省発行の『教育雑誌』89号で目賀田種太郎によってプライユ考案の6点点字が紹介されているが、この時点では学校教育で採用されるにはいた

- らなかった。
- (4) 金子 (2007 : 12)
 - (5) 明治33年式棒引きかなづかいの点字かなづかいへの影響については、金子 (2007 : 106-107) に、「1900 (明33) 年に「小学校令施行規則」が改正され、小学校の教科書に「字音仮名遣い」(字音棒引きともいう) が採用された。(略) これが採用されるとすぐに点字表記にも取り入れられ、「折衷仮名遣い」(和語は歴史的仮名遣い、漢語は表音式仮名遣い) となった。」とある。
 - (6) 委員は全国の盲学校校長ら6名や、『点字大阪毎日』の大野加久二など点字関係者11名によって構成されている。
 - (7) 金子 (2007 : 187-190)
 - (8) 金子 (2007 : 221-223)
 - (9) この研究会は小林卯三郎、鳥居篤治郎、大野加久二といった近畿地域の点字関係者によって構成されていた。そしてこの表記法の研究をおこなうため、点字委員会を設置し、研究がすすめられた。しかし、戦争の激化により研究は中断し、この表記法は採用されなかったという。(金子2007 : 204-205)。
 - (10) 「活用」か。
 - (11) 同じく第3期の点字表記法書として、1942 (昭和17年) に日本盲人図書館より刊行された『点訳の栞』がある。ここにかかれているかなづかいは、近畿盲教育研究会『点字規則』のかなづかいとほぼ同様の内容となっている。また、戦後1951年 (昭和26年) に、『点字規則』の改訂版がだされている。これは、第4期への移行期間の資料と位置づけることができるだろう。
 - (12) (金子2007 : 222)
 - (13) 古文と漢文のかなづかいは、和語は歴史的かなづかい、字音語は長音表記に長音符をもちいる棒引きかなづかいでかかれる。
 - (14) 点字表記法書のなかではじめて「現代かなづかい」への言及があらわれるのは『改訂日本点字表記法』であるが、そこには「現代語の点字かなづかいは、現代国語の音節と標準との対応関係を明確にする」としてされている。(金子2007 : 資料25)
 - (15) 同時に、日本語文字・表記研究には当然日本語点字研究をふくめるべきでもある。

参考文献

- 大河原欽吾 (1937) 『点字発達史』(培風館)
- 金子昭 (2007) 『資料に見る点字表記法の変遷―慶応から平成まで』(日本点字委員会)
- 新谷嘉浩 (2006) 「小西信八の生涯」『日本聾史学会報告書』(4)
- 愼英弘 (2010) 『点字の市民権』(生活書院)

鈴木力二（1987）『伝記叢書13日本点字の父 石川倉次先生伝』（大空社）

東京盲学校（1935）『東京盲学校60年史』

日本点字委員会（2001）『日本点字表記法 2001年版』

広瀬浩二郎（2010）『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』（生活書院）